

マキシ・グリーンにおける「苦難／可能性」の教育理念

—アートとしての文学と教育—

佐藤 隆之

はじめに—問題設定

本稿の目的は、アメリカの教育哲学者マキシ・グリーン (Maxine Greene, 1917-2014) が説く「可能性」の教育という理念について、プラグマティズムと実存主義 (existentialism) を結びつけながらアートとしての文学と融合させた、独自の教育哲学に注目して再検討することにある。グリーンにおいて「可能性」と「苦難」(「苦難」の意味は後述) は、「可能性」は「苦難」から開かれると同時に新たな苦難を生じさせるという逆説的な関係に置かれている。その関係性を解明することで、グリーンの教育理念を、「苦難」と「可能性」を反転させながら連続的に展開させる主体の育成をめざす「苦難／可能性」の教育として再提起する。

グリーンは、とりわけその芸術教育や美的教育が日本でも知られており、その中核概念である想像力、自由、対話などに着目した研究がある (高屋 1999; 木村 2009; 内田 2016; 横山 2016)。グリーン研究が日本においても進められているなか、本稿は、芸術・美的教育に特化することなく、グリーンがめざす教育理念を考察の対象とする。そもそもグリーンはどのような教育を志向し、それにはどのような特質が認められるのか。もちろんそのことは、芸術・美的教育やその主要概念に注目した先行研究のなかでも論じられてきた。その「美的教育哲学」を解明した論考もある (桂 2008)。「グリーンの教育哲学」にまで踏み込み、彼女は「アートの教育を自己と世界と他者の存在論的な認識の方法として提唱」したということも指摘されている (佐藤 2003: 21)。このような蓄積をふまえてここでは、文学という「アート」と融合させた「グリーンの教育哲学」に焦点化する。それにより、グリーンによるデューイの継承・発展について理解を深め、グリーンを芸術・美的教育以外の領域にまで広げて応用する基礎作業とすることを期したい。

その際とくに注目したいのが、グリーンを評してよくいわれる「可能性」の教育である。「可能性」にグリーンの特徴をとらえた論考が複数ある (Ayers 1998; Goodman, Teel 1998; Frank 2011)。日本でもグリーンの「可能性としての教え」 (Greene 1997) という論文の分析を中心にした論考がある (木村 2014)。実際、本稿で明らかにするように、主著『自由の弁証法』(1988年)においてグリーンは、自由を「可能性」と読み替えて理論の軸に据えている。ただし、グリーン自身は「可能性」の教育は独自のものではないとし、「いかなる意味においても、可能性という意識を覚醒させる初めての試みではない」ともいう (Greene 1988: 23)。自身は控えめに主張している「可能性」の教育の特質はど

こにあるのか。

それについてここでは、『自由の弁証法』第1章の冒頭を精読することで考察する。そこにおいては、二人の文学者から引用したうえで、アレントやフーコーを絡ませてデューイを論じ、それにサルトルを加味するかたちで論が展開されている。グリーン独自のアプローチである、プラグマティズムと実存主義の融合を基礎とする哲学と文学の融合が明瞭に反映されている。それを対象としてグリーンが説く自由になれない理由を論じたうえで（第1節）、そこから導かれる自由になるための方法について検討する（第2節）。それをふまえて、グリーンが説く“not yet”が、「可能性」への希望や期待と同時に、「可能性」が達成されていない失望や落胆という二重の意味を有することに注目し、その教育理念を「苦難／可能性」の教育として再提起する（第3節）。

1. 自由になれない理由―「秘かなおびえ」のメタファー

1.1. 「個人的自由」と「ケアと思考の欠如」

『自由の弁証法』第1章の冒頭でグリーンは、自由の現状と教育のあり方について、こう憂慮している。各国が経済的な競争、科学技術、権力などにおいて優位に立つためにしのぎを削っている。そのような国家間の争いや対立は、個人の生き方にも反映されている。個人の自由とは、なによりも個人の「自立（self-dependence）や自己決定（self-determination）」にはかならないとされているのである。とりわけアメリカでは、生まれつき自由であるという意識が高く、自己成就や独立が「アメリカン・ドリーム」とみなされてきた。かくして、国であれ個人であれ、「結びつきや、コミュニティにおいて共にあること」を欠いた自由がはびこり、その結果、無責任、文盲、相対主義、倫理に反する行動といった問題が生じている（Greene 1988: 1）。

ここでグリーンは、2010年代半ば以降顕著になる自国第一主義に通じる、国家の閉ざされた自由の問題を既に洞察している。その問題が、個人に能力があれば自由になれるという誤解を生む温床になっているとする。そのような自由をグリーンは「個人的自由」と呼ぶ（Greene 1988: 1）。

自由になれない理由としてグリーンが「個人的自由」の代わりにあげているのは、「ケアの欠如（carelessness）」であり、「ある種の思考欠如（thoughtlessness）」である（Greene 1988: 1）。それが自由を妨げる理由は、ネル・ノディングズのケアリングと実存主義の二つに求められている。

『自由の弁証法』では、ノディングズの『ケアリング』から、「ケアリングとは、集団と個人をどちらも保持することで、私たちが負っている義務に限界を設けて、実際に果たせるようにする」という一文が引用されている（Greene 1988: 84-85; Noddings 1984: 101）。ノディングズのケアリングにおける「ケア」は、個人から切り離された合理的な論理ではなく、「集団と個人」あるいは自己と他者の関係性に規定された倫理である。その倫理によって、それぞれが果たすべき義務を負いながら、その限界内で自由を遂行する。それが理想的かつ現実的な自由の実践である。だとすれば、自由の成否の鍵を握るのは、個人やその能力ではなく、他者とケアし合う関係性にある。そのような関係性を欠いた思考は、自分、他者、世界への配慮を欠いた、独りよがりな思考にとどまる。いくらそのような個

人的思考を重ねても、他者や世界の自由から切り離されているために、私の自由とあなたの自由が衝突し、自由になることは難しい。「ケアの欠如」が人を不自由にする理由は、さしあたりそのように説明できる。

このようなグリーンの自由論は、経済・科学・政治といった人間が生きる環境や状況といった外的条件ではなく、人間が現実存在して生きることそのものに目を向けている。その理論的基盤となっているのが、グリーン教育思想においてプラグマティズムと並ぶもう一つの柱となっている実存主義である。グリーンはプラグマティズムを実存主義、より具体的にはデューイをサルトルで補完した教育哲学を説いた（Johnson, Reed 2012: 14-15; 佐藤 2003: 22-23）。とりわけ実存主義に関していえば、グリーンはアメリカ哲学史においては、サルトルの「実存主義」研究によってコロンビア大学で職を得たことが指摘されている（Kuklick 2001: 239-2020: 343）¹。実際、『自由の弁証法』の第1章ではサルトルが引用され（Greene 1988: 5）、そのさらに後では、メルロ＝ポンティが説く「実存のプロジェクト」が言及されている（Greene 1988: 49）。

実存主義の立場からグリーンは、実存的な生が不可避に抱える「苦」による自由の阻害を重くみる。『自由の弁証法』には、「苦」に関わる語がいくつも用いられている。第1章冒頭では、すぐ後にみるように、“afflict”（苦しめる）を用いている。その他にも、“distress”（苦悩），“hardship”（苦勞），“suffering”（苦痛），“predicament”（苦境）などがある。またそのような状況を引き起こす原因を示す語として、“difficulties”（困難），“problems”（問題）、それらを象徴する“obstacles”（障害），“walls”（障壁）などが用いられている。このようにグリーンの主張は、実存的な生は「困難」を不可避とし、それゆえに様々な「苦」をとまなうことを前提としている。ここでは「苦（苦悩、苦勞、苦痛、苦境）」やその原因となる「困難（問題、障害、障壁）」を合わせて「苦難」と呼んでおく。

実存的な生からすれば、その「苦難」ゆえに、個人に「自立」し、「自己決定」する能力があっても、ただちにそれを活かして生きる選択をし、思考をはたらかせて行動できるとはかぎらない。能力があっても、「苦難」に怯んで対峙することなく避けたり、目を塞いだりしてしまうこともあるからである。そもそも直面している「苦難」を認識できないこともあるかもしれない。後述のようにそのような気づきがたい、知らぬ間にはまり込んでいる無自覚の「苦難」をグリーンは、不自由の由々しき原因とする。能力の有る無しにかかわらず、恐怖、回避、無自覚などにより「苦難」に目を閉ざしてしまえば、そこからどう抜け出すかを思考することができず、不自由に甘んじることになるおそれがある。それがグリーンのいう、自由になれない理由としての「思考欠如」である。

かくしてグリーンは、ケアリングと実存的な生の哲学の交点において、自由になれない理由は、「個人的自由」ではなく「ケアと思考の欠如」にあるとする。ここで注目したいのは、「ケアと思考の欠如」についてグリーンが、それがいかなる不自由であるのかについて、T. S. エリオット（T. S. Elliot, 1888-1965）とヴァージニア・ウルフ（Virginia Woolf, 1882-1941）という二人の作家に依拠して、理解を深めようとしていることである。グリーンは『自由の弁証法』の冒頭で哲学的思索に入る前にまず、二人の文学者に語らせる。それにより、「ケアと思考の欠如」ゆえに不自由に陥いる生の実態に

迫ると同時に、それを免れる方向性を探る。

ただし、グリーンへの解説は極めて簡潔であり、かなりの解釈を要する。（だからこそ、本稿のような試みが成り立つ。）文学というアートと融合させたその教育論は、想像力を発揮して思考するよう学び手を挑発する。以下は、二人の文学者からの引用と、それに関する読解の余白を多分に残したグリーンへの主張についての一解釈である。

1.2. 「無気力、無関心、ケアの不足」

まずはエリオットからみると、グリーンが引用しているのは、エリオットの『寺院の殺人』（1935）の冒頭である。『寺院の殺人』は、ヘンリー二世による統治下の12世紀、イギリスのカンタベリー大寺院で起きた、カンタベリーの大司教トーマス・ベケット（Thomas Becket, 1118-1170）の暗殺を描いた詩劇である。そのなかからグリーンは、貧しい生活を送る「カンタベリーの女たち」の合唱の一部を引用している。亡命先のフランスから大司教ベケットが7年ぶりにカンタベリーに戻るという事件をきっかけに、何か恐ろしいことが起こるのではないかという不安が歌われている。

その合唱のなかでは、自分たちは、「抑圧」、「貧困」、「小さな不正」、「生死」、「醜聞」、「重税」などに日々直面しながら、「笑い」や「噂話」に興じたり、逃げ出したり、ただ甘受したりして、生きてきたことが語られている。その生のあり様は、「それでも生きてきた、あたしたちは生きてきた、なかばうつろに生きてきた……あたしたちはそれぞれ私的な恐れをもち、めいめいの暗い影を、秘かなおびえ（secret fears）を心のすみにいだきつづけてきた」と表現されている（Greene 1988: 1-2; Eliot 1958: 180-181=1950: 13）。

エリオットからのこの一節についてグリーンは、「ケアと思考の欠如」とは何かをよく伝えるものとして、こう短く一文でコメントしている。「エリオットは、多くの20世紀の芸術家が表現したこと、すなわち無気力（lassitude）、無関心（disinterest）、ケアの不足（absence of care）を表現した」（Greene 1988: 2）。なぜ「無気力、無関心、ケアの不足」が「ケアと思考の欠如」を招き、自由を阻害するのか。まず確認しておきたいのは、『寺院の殺人』からのこの一節は、グリーンの実存的な生の理解と共鳴しているということである。実存的な生のあり様を示すうえで、エリオットからの引用は実に効果的である。グリーンが引用したすぐ後の箇所で大司教トーマスは、カンタベリーに暮らす女たちの嘆きを聞いて、こういう。「……そっとしておくがよい、みんな気が昂ぶっているのだ。……かれらは知っていて知らないのだ、行動とは忍苦のことであり、忍苦とは行動にほかならぬことを」（Eliot 1958: 182=1950: 14-15）。ここにおいては、グリーンがいわんとする、生きて行動することと表裏一体である苦しみ詩的に表現されている²。

グリーンは、エリオットからの引用箇所のなかでもとくに、「秘かなおびえ」のメタファーに注目する。後述のように、それは現代人にも通じるとする。「おびえ」は、実存的な生が不可避に伴う、「抑圧」、「貧困」、「小さな不正」、「生死」、「醜聞」、「重税」といった様々な不安や悩みの象徴である。そのような「苦難」を概して人々は、回避（「笑い」や「噂話」）し、逃避し、甘受してしまう。それと

対峙して克服しようとすることは希である。「なかばうつろに生きてきた」という表現がそれを示唆する。そのために思考をはたらかせることもままならない。ここでは、グリーンがいう「思考の欠如」が、実存的な生のありがちな末路として描出されている。

他方、「秘かな」が含意するのは、「それぞれ私的な恐れをもち」とあるように、そのような不安や悩みが個人的な世界に閉ざされ、人々が互いにケアする関係にないということである。「なかばうつろに生きてきた」こともあり、不安や悩みは「めいめいの暗い影」として、一人ひとりの内面に隠蔽され、他の人には気づかれない。それゆえに分ち合われることもない。こちらはグリーンがいう「ケアの欠如」の描写となっている。

総じて「秘かなおびえ」のメタファーは「ケアと思考の欠如」の説明となっているが、グリーンはそれを表現したのが「無気力、無関心、ケアの不足」だとしていた。「個人的自由」ではなくそれこそが人間を不自由にしているというのであるが、なぜか。

まず「無気力」からみると、原語の“lassitude”は、だるさ、脱力感なども意味する。エリオットの引用でいえば、カンタベリーに暮らす貧しい女たちは、国王などからの「抑圧」に脅え、「貧困」とそれに輪をかける「重税」に恐れおののくばかりである。「無気力」は、そのような状況に対する回避、逃避、甘受を指している。それは、日々の生活の「苦難」が、一つひとつは些細であるかもしれないが積み積みもつてもたたらす、ある種の虚無感や諦念、それにともなう思考停止を示唆する。それが人を不自由にする根源的な理由だという。

「無気力」に続く「無関心」と「ケアの不足」は共に、自己や他者や世界に「関心（interest）」がもてない、あるいは「関心」がもてたとしても「ケア」するには至らない状態を意味する。いずれにしても、人と世界、人と人を分断し、孤立させる。それが問題なのは、グリーンが先に憂慮していた「個人的自由」偏重の原因となり、拍車をかけるからである。また、思考できたとしても、他者とのつながりを欠いているがゆえに自己完結した思考にとどまり、自己の自由と他者の自由が共存できないからである。

エリオットを参照することでグリーンは、「ケアと思考の欠如」について「無気力、無関心、ケアの不足」という観点から考えるよう読者を促す。そのうえで、それが実は今を生きる私たち自身の問題でもあるとする。「現代人を苦しめている（afflict）『秘かなおびえ』とは、病気、大気汚染、犯罪、暴動、核戦争などであろう。多くの人が、『生きている、なかばうつろに生きている』のが現状である」（Greene 1988: 2）。「秘かなおびえ」の現代版として、「病気、公害、犯罪、暴動、核戦争」などがあげられている。それらが現代人を「苦しめている」。しかるに私たちは「なかばうつろに生きて」いないか。つまり、そのような「苦難」を回避、逃避、甘受し、ケアする関係を築けず、自由になることができているのではないのか。グリーンはそう問う。そのうえでさらにもう一人の文学者ウルフを援用することで、それが容易ならざる問題であることを強調しながら、自由になるための方法について論を進めていることを次に考察する。

2. 自由になるための方法—文学から教育へ

2.1. 「綿の中に埋め込まれている」ことの「苦難」と「可能性」

グリーンは、ウルフの自伝的作品『存在の瞬間』（1976）からの一節を引きつつ、こう指摘している。「ヴァージニア・ウルフはそれ『無気力、無関心、ケアの不足』：引用者注」を、「意識的に」生きることとは対照的な、『言い表しがたいある種の綿（cotton wool）の中に埋め込まれている』存在になぞらえた」（Greene 1988: 2; Woolf 1976: 70=1983: 107）。エリオットの「秘かなおびえ」のメタファーに対して、ウルフにおいては「綿」のメタファーが注目されている。

「無気力、無関心、ケアの不足」の比喩とされる「綿」からは、三つの意味が読み取れる。①「意識的に」生きることとは対照的であるということ、②「言い表しがたい」ということ、③「埋め込まれている」の三つである。「無気力、無関心、ケアの不足」とは、人間の生の無意識的な側面であり、言葉にしがたいためにとらえどころがなく、それゆえに抜け出しがたいということを示唆する。「綿」としての「無気力、無関心、ケアの不足」に人は、①知らぬ間に陥り、それゆえに、②とらえがたく、③抜け出しがたい、という難題を抱えることになる。

このような「綿」のメタファーが「秘かなおびえ」のメタファーに新たに付け加えていることは、大きくは二つある。

- A：自由になることを妨げている「無気力、無関心、ケアの不足」は、人間の生の大半を占めているにもかかわらず、そこから抜け出すことは容易ではない。なぜなら、上に述べたように、人はその状態に知らぬ間に陥り、それゆえに気づきがたく、そのままの状態に留まってしまうがちだからである。（エリオットの「カンタベリーの女性」はその一例である。）「綿の中に埋め込まれている」とは、そのような根深い「苦難」を象徴的に言い表している。
- B：と同時に、その裏返しとして、「無気力、無関心、ケアの不足」は、「埋め込まれている」状態にあることに気づきさえすれば、そこから抜けだす道を開きうる。「無気力、無関心、ケアの不足」は、「気力、関心、ケア」へと転換させうるのである。「綿の中に埋め込まれている」ということは、その状態から開かれて別の状態になる「可能性」の暗示でもある。

この二点を論証するために、グリーンが『存在の瞬間』から引用したウルフの文言を、その前後を含めて検討してみたい。まずはAから考察すると、この引用は「過去のスケッチ」と題する回想からのものである。ウルフによれば、現在から過去を振り返って思い出されるのは、「ある忘れられない印象を与えた経験やその世界を支配した人物たち」ばかりである。それをウルフは「存在の瞬間」と呼ぶ。ウルフは回想録がその「存在の瞬間」だけでよいのか疑問に思う。なぜなら、人が「覚えていない」、「忘れてしまった」、「意識して生きられてはいない」ことが人生にはあり、しかもそれが大半を占めているからである。これをウルフは「非存在」と呼び、「日常の日々は、存在よりも非存在

の方をはるかに多く含んでいる」という（Woolf 1976: 69-70=1983: 106-107）。人生を顧みるとき、まるでなかったかのように忘れられてしまった「非存在」があり、しかもそれが実は人生の大半を占めている。その「非存在」抜きにした回想をウルフは超えようとする。「綿の中に埋め込まれている」ことをとらえ、開示しようとしているのである。

「非存在」（「綿」）の例としては、「よい日だった」という記憶における「よさ」があげられている。人は「よい日だった」ことを思い出せる。「存在」が確認できる。しかし、いかなる意味で「よい」と感じたのか、その「よさ」までは往々にして思い出せない。つまり「非存在」である。グリーンが引用したのは、それについてウルフがいう、「そのよさは言い表しがたいある種の綿の中に埋め込まれている」という一文の一部である。この「よさ」を例にウルフは、今思い起こすことができる「存在の瞬間」は、「もっとはるかに多くの非存在の瞬間に埋め込まれている」とする（Woolf 1976: 70=1983: 107）。『存在の瞬間』は実は「非存在の瞬間」の書でもあった。

「よい日」の「よさ」のように、今はもう忘れてしまい、覚えていないし、意識されることもないが、実は生きることの大半を占めているのが「非存在の瞬間」である。だとすれば、「綿」になぞらえられる「非存在」としての「無気力、無関心、ケアの不足」の影響がいかに甚大であることか。「無気力、無関心、ケアの不足」に陥っている人は、人生の大半をそのような状態で過ごすことを余儀なくされるのである。にもかかわらず、「無気力、無関心、ケアの不足」に陥っていることは、それが「綿の中に埋め込まれている」「非存在」であるがゆえにとらえ難い。そうであるがゆえに、グリーンがウルフからの引用に簡潔にコメントしていたように、人は「無気力、無関心、ケアの不足」に、①日々の生活のなかで知らぬ間に陥り、それゆえに、②とらえがたく、③抜け出しがたい。「無気力、無関心、ケアの不足」を克服し、「ケアと思考の欠如」から脱して自由になることがいかに困難か。実存的な生において人はそのような「苦難」も引き受けざるをえない。ウルフを借りてグリーンはそう主張する。

2.2. 「存在する別のあり方」の「覚醒」—個性教育か

その一方でグリーンは、ウルフがいう「綿」のメタファーに、先にBとして提示した通り、「無気力、無関心、ケアの不足」に気づき、克服する余地を、明確に主張しているわけではないが認めている。それについて読解するうえでもやはり、ウルフが「綿」について言及している箇所を読み込むことが有益である。

ウルフは作家として、「非存在」をとらえることは可能としている。「真の小説家はどうかして両方の種類の存在を伝えることができるのだ」と述べている（Woolf 1976: 70=1983: 108）。ウルフはここで、グリーンが「無気力、無関心、ケアの不足」の言い換えとみなした「綿」という「非存在」を、文学はとらえることができるとしている。

グリーンがウルフに期待を寄せるのは、「非存在」というとらえがたいものをとらえ、「非存在」から抜け出す方向性を示唆しているからである。グリーンはウルフからの引用の直後に、自由になるた

めの新たな方法を次のように提案している。

習慣，単なるルーチン，無意識的行為といった「綿」と決別するということは，（これからみていくように）存在する別のあり方（**alternative ways of being**）を求めるということであり，開けを探すということである。そのような開けを見つけることは，新しい可能性—しばしばそれはこの世界で自由を達成する新たな方法になる—を発見するということである。（Greene 1988: 1）

ここでグリーンは「綿」を，「習慣」，「ルーチン」，「無意識的行為」などの象徴と解釈する。それをふまえて，「無気力，無関心，ケアの不足」が「習慣」として固定化され，お決まりの行動様式となったり，無思慮に行為したりすることとの「決別」を提案する。

そのためにできることについてグリーンは，「（これからみていくように）」と断っているように，それこそが『自由の弁証法』を通して解明する課題であることを予示する。ここではひとまず，その課題に対するアプローチが，①「存在する別のあり方を求めるということ」として提案されている。その方法が②「開けを探すこと」である。「開け」とは，「綿の中に埋め込まれている」状態から抜け出す突破口である。それをまずは探すところから，今ある存在とは別の「存在する別のあり方」を見つける。それが③「新しい可能性を発見する」ことにつながる。かくして，①～③に基づく「この世界で自由を達成する新たな方法」によれば，「無気力，無関心，ケアの不足」を脱しうる。

ここでいう「新しい可能性」の「発見」は，「綿」のメタファーからすれば，「綿の中に埋め込まれている」状態にあることを意識することである。この意識化をグリーンは「覚醒」と呼ぶ。「本書は，可能性という意識を再び覚醒（**reawaken**）させようとする初めての試みではない」とグリーンは述べている（Greene 1988: 23）。独自の主張ではないにせよ，グリーンは「（再）覚醒」により「可能性」を「意識」させることを意図していた³。

以上からすれば，グリーンが説く「可能性の教育」とは，「存在する別のあり方」の「覚醒」に基づく教育ということができよう。グリーンは「無気力，無関心，ケアの不足」という「習慣（ルーチン，無意識的行為）」から「覚醒」して，「存在する別のあり方」という「新しい可能性を発見」しうる主体の教育を理念として掲げているようである。

そこでいう「可能性」は，基本的には，一人ひとりが生来的に有しているが，まだ発揮されていない潜在能力を開化させることを意味する。その点では個性教育と軌を一にするようである。しかし，先に論じたようにグリーンは，個人に帰される能力に重きをおかない。そのことは，個人的自由に関する考察のところで既に明らかにした。

それを個性教育と呼びうるとすれば，個々に潜在していると想定される能力を発揮させることそのものよりもむしろ，それが発揮されていない理由や過程に焦点化しているところに特徴がある。ここで論じてきたように，グリーンは個人的な能力の発現を，楽観的に主張しているわけではない。彼女がいう「可能性」は，様々な「苦難」を前提としている。たとえば，「ケアと思考の欠如」，その主因

としての「無気力，無関心，ケアの不足」などがそうである。その「無気力，無関心，ケアの不足」に人は，知らぬ間に陥り，それゆえにとらえがたく，抜け出したいということも指摘されていた。そのような状態が「習慣，単なるルーチン，無意識的行為」となってしまうと，存在しないも同然の「非存在」となり，そこから抜け出す糸口すら見つけがたいということになる。「可能性」とは，そのような「苦難」のなかに「開け」を見出し，それを突破口として「開かれる」「存在する別のあり方」とみなされていた。「可能性」としての個性を発揮させる以前に，もっているはずの能力が発揮されないという「苦難」の克服の方に重点がおかれている。

だとすれば，グリーンが説く教育は「可能性」の教育というよりはむしろ，「苦難」としての教育といった方が適切なのかもしれない。いったいグリーン教育思想において，「可能性」と「苦難」はどのような関係にあるのか。

3. 「苦難／可能性」の教育へ―“not yet”の理念

グリーン教育思想における「可能性」と「苦難」の関係性を検討するうえでは，彼女がいう“not yet”（今はまだない）が注目に値する。“not yet”はグリーンに関する研究書のタイトルにもなっており，グリーン教育思想の代名詞ともなっている（Pinar, ed. 1998）。グリーンは「可能性」を“not yet”とも表現している。「新しい見方がさらに開かれる」ことは「可能性を開く」ことであり，「一人ひとりが自分自身の立場から，ありえること，あるべきこと，今はまだない（not yet）ことへと向かう」ことだという（Greene 1988: 21）。『今はまだない（not yet）』は，常にある程度隠されている」とも指摘する（Greene 1988: 58）。現時点においてはまだ達成されていない，あるいは「隠されている」状態の「可能性」へと向かうのが“not yet”の理念である。

“not yet”としての「可能性」は，人は誰しも未来に向けて「可能性」を追求しようという希望や期待と，それが現在においてはまだ実現されていないという失望や落胆という二重の意味を帯びている。“not”という否定を含む“not yet”は，未来に期待を寄せつつ，現状に対する落胆を暗示するという両義性を有するのである。「可能性」が「隠されている」という指摘からすれば，“not yet”は，「隠されている」が存在することはたしかなのだから，それを見つければよいという希望の表明といえる。それはしかし，まだ「隠されている」状態にあり，実現されていないという失望でもある。先に考察した通りグリーンは，ウルフの「綿の中に埋め込まれている」という言い回しに，同様の二重性を読み取っていた。埋め込まれているのであればそこから抜け出せばよいという希望と，そうではあるが脱出できていないという失望や，あるいはそもそも「綿の中に埋め込まれている」ことには気づき難いという悲劇が言及されていた。“not yet”はその二重性とも符合する。そのことは、『自由の弁証法』の「序文」に，「私の希望」として記されている次の一文がよく示している。

読者には，失われたある種の自発性を思い出して欲しいのだ。今とは違う何かになる，つまりは新しい何かになるという，忘れられてしまったあの熱い願いを思い出して欲しいのだ。（Greene

1988: xii)

「今とは違う何かになる、つまりは新しい何かになる」ということは、グリーンが先に言及していた「存在する別のあり方」であり、その言い換えである「新しい可能性の発見」と重なる。人はその「可能性」を追求する「自発性」を元来もっているはずである。つまり、人間は、「今とは違う何か」、「つまりは新しい何かになりたいたい」という「熱い願い」をもっていたはずだ。ところがその「熱い願い」は往々にして、「失われ」、「忘れられて」いるのではないか。それを「思い出」し、「可能性」への「熱い願い」（「自発性」）を取り戻してほしい。そう説くグリーンの主張には、「可能性」に対する希望や期待と、それが発揮されないままであるという失望や落胆が混じり合っている。

ではそのような二重性や両義性は理論的にいかなる関係にあるのか。これに関してグッドマンとティールは「可能性の情熱—マキシ・グリーン、民主的コミュニティ、教育」という論考において、グリーン教育思想に「希望」を読み取る一方で、それが「苦しみ」を源泉としているという逆説的な指摘をしている。グッドマンとティールは、グリーンがサルトルの『存在と無』から次の一節を引用していることに目を向けている。「……われわれが別の状態に思いおよぶことができたときから出発して、はじめて、一つの新たな光がわれわれの苦痛や苦悩のうえに差しこみ、われわれはそれらの苦しみが耐えがたいものであることを決定するのである」（Sartre 1966: 561=2008（1943）: 23、強調原文）⁴。

ここで重要なのは、グリーンとの共通性が認められているこのサルトル——サルトルもまた文学者であり、文学と哲学を融合させた——の文言において、「可能性」が「苦しみ」を特定すると同時に、その「苦しみ」は「耐えがたいもの」と認定されることで「可能性」になりうるという反転が指摘されていることである。ここにおいては「可能性」は「苦しみ」の原因である点で、逆説的に「苦難」と解釈されている。ただし、その「苦難」は「可能性」によってはじめて顕現し、それゆえに「可能性」へと開かれている点で、これまた逆説的に「可能性」でもある。グリーン教育思想において「可能性」は、「苦難」でもあるということになる。

「苦難」との分かちがたい関係におかれ、両義的な意味を有する「可能性」をここでは、「苦難／可能性」と記す。グリーンが「可能性」の教育を理念として掲げたというとき、それは「苦難／可能性」の教育として再提起することができるだろう。

「苦難／可能性」の関係性については、こう解釈できる。サルトルがいう「別の状態に思いおよぶ」とは、グリーンがいう「存在する別のあり方」、すなわち「新しい可能性の発見」と重なる。この「可能性」の発見は、今までは気づかなかった「苦しみ」、ここでの考察でいえば「苦難」を顕わにする。「可能性」に気づくことで、「今はまだ」達成されていないことにも気づくのである。先述の通り、この「気づき」をグリーンは「覚醒」と呼ぶ。「覚醒」により「可能性」は「苦難」を顕現させる。その際、その「苦難」は「耐えがたいもの」でもある。ここでいう「耐えがたいもの」とは、「耐えがたい」のだから、なんとかそこから抜け出したいという、グリーンがいうところの「自発性」や「熱

い願い」を示唆する。だとすれば「耐えがたい」という「苦難」は、「苦難」から「可能性」へと開かれる契機を内在させている。そもそも「苦難」が自覚されたのは「可能性」があるからであった。その意味で「苦難」は、「苦難」を乗り越えた状態としての「可能性」を同時に予告している。グッドマンとティールによれば、そのように「可能性」が「苦難」になり、「苦難」が「可能性」になるという反転がグリーンの「可能性への情熱」に読み取れる。

かくして、グリーンがいう「可能性」と「苦難」は、「可能性」とは「苦難」であり、「苦難」とは「可能性」であるというような逆説的な関係におかれていることになる。それが「苦難／可能性の教育」における「苦難」と「可能性」の基本的な構造である。

グリーンがいう「可能性」としての“not yet”の教育理念は、その構造に基づき、「可能性」が「苦難」を生み、「苦難」が「可能性」を生むという連続性を継続できる主体の育成をめざす。ここにおいて「苦難」はたんなる個人的な不満や嘆きなどではなく、「新しい可能性の発見」から特定されるものである。そうして特定された「苦難」は、「可能性」によって照射されたものであるがゆえに、「苦難」を克服して「存在する別のあり方」に変容する方向性を示している。つまり「可能性」へと開かれている。ここでいう「可能性」はたんなる楽観的な希望や期待などではなく、どう生きるかの選択とその実践を指し示す。このような意味で「苦難」と「可能性」を反転させ、連続させうる主体の育成が、グリーンが理念として掲げる「苦難／可能性」の教育である。

おわりに—アートで挑発する教育

以上、本稿においては、グリーンが説く教育理念について、アメリカの自由に対する批判的検討、それをふまえた独自の自由観や自由になる方法に関する主張、それに基づいて提起される「可能性」の教育の含意という観点から考察してきた。グリーンは、個人の能力や自立を重視する「個人的自由」の偏重を批判して、実存主義の立場から「ケアと思考の欠如」こそが自由を妨げる最大の要因と説いていた。「ケアと思考の欠如」に関する分析は、エリオットとウルフという二人の文学者に依拠していた。エリオットからは「秘かなおびえ」のメタファーを用いて、実存的な生が抱える「苦難」ゆえに、人々が孤立し、思考することもできない様を示す。それにより、「ケアと思考の欠如」とは、「無気力」という虚無感・諦念・思考停止や、「無関心」・「ケアの欠如」という自己・他者・世界に対する関与の欠損と個人的自由の偏重にほかならないと説いていた。

他方、「無気力、無関心、ケアの不足」に関するウルフによる説明とされる「綿」のメタファーは、そのような「秘かなおびえ」がもたらす問題の根深さと同時に、それを打開する方向性を示していた。「綿」は、今はもう忘れてしまい、覚えていないし、意識されることもない「非存在」のメタファーである。それは人生の大半を占めているがゆえに、「綿」になぞらえられる「非存在」としての「無気力、無関心、ケアの不足」の影響も甚大である。しかも、そのような状態に陥っていることは、それが「非存在」であるがゆえにとらえ難く、「習慣（ルーチン、無意識的行為）」として定着してしまいがちである。よって、「無気力、無関心、ケアの不足」を克服し、「ケアと思考の欠如」から脱し

て自由になることそれ自体が「苦難」となりうる。しかし、逆にいえば、ひとたび「綿の中に埋め込まれている」ことに気づいて、「非存在」を「存在」させることができれば、「苦難」から脱する方向性、つまりは「可能性」が示されることになる。ウルフから示唆をえてグリーンはそう主張し、「苦難」と対峙して「存在する別のあり方」という「新しい可能性を発見」という方法を提起する。それにより、生来的で潜在的な個性を伸ばす「可能性」を見据えつつ、個性が発揮されないという「苦難」に焦点化した独自の個性教育を説いた。

その理念においては「可能性」と「苦難」が渾然一体となっているが、その関係性をここでは、“not yet”の理念に注目して論じた。“not yet”は、人は誰しも未来に向けて「可能性」を追求しようという希望や期待の表明である。と同時にそれは、現在においてはそれがまだ実現されていない失望や落胆も含意する。そのような失望や落胆は「苦難」になりうる。そこにみるようにグリーンにおいて「可能性」と「苦難」は、「可能性」が「苦難」になり、「苦難」が「可能性」になるという反転を特徴とする。つまり、「可能性」の発見という希望は、「今はまだ」達成されていない、不十分であるという失望、つまりは「苦難」を顕わにする。と同時に、その「苦難」は、「可能性」による気づき（グリーンの言葉でいう「覚醒」）である限りにおいて、その克服が視野に収められている。その意味において「苦難」が同時に「可能性」でもあるとみなされる。そのように「苦難」と「可能性」が逆説的な関係において分かちがたく結びついていることを、本稿では「苦難／可能性」と言い表した。それに基づけば、グリーンがいう「可能性」の教育理念は、「可能性」が「苦難」を生み、「苦難」が「可能性」を生むという連続性を継続できる主体の教育をめざしている。それをグリーンは、文学というアートを応用した教育論によって提起した。

「苦難／可能性」の教育は、プラグマティズムに実存主義を接合するという、グリーン独自のもう一つのアプローチをとった結果ともいえる。「可能性」の教育は基本的には、グリーン教育思想が依って立つプラグマティズムと実存主義という二つの柱のうち、「希望の哲学」ともいわれる前者のプラグマティズムの影響を色濃くしている。しかし、こと人間の生の分析に関してグリーンは、本稿でも論じたようにサルトルに多くを負っていた。このプラグマティズムと実存主義の接合についてはさらに検討する余地を残している。

そもそも本稿は「苦難／可能性」の教育の理論の一端を考察したにすぎず、逆にグリーン教育論に関する課題がいくつも提起されることになった。これはグリーンによるアート（文学）を応用した教育による挑発のなせるわざなのかもしれない。「苦難」と「可能性」が反転しながら連続する教育過程とは何か。その過程において「覚醒」はどう機能するのか。グリーンはデューイを継承・発展させて「苦難／可能性」の教育を主張するわけだが、とりわけ連続性の継続はデューイが説く“more growth”（Dewey 1916: 56=1975: 89）や、デューイに端を発するといわれるいわゆる問題解決学習とはどう異なるのか。“not yet”の理念に支えられたグリーンの「可能性」としての教育について探究する本稿もまた“not yet”であり、さらなる問いに開かれ続けることになる。

付記：本稿は、「早稲田大学 2020 年度 特定課題研究助成費」（研究課題名「アメリカにおける経験主義教育の継承と発展にみるプラグマティズムと実存主義の再統合」[課題番号 2020C-112]）による成果の一部である。

注

- 1 本稿において訳書を用いる場合、原書の刊行年と頁数の後に、訳書の刊行年と頁数を記した。訳文には、必要に応じて変更をくわえた。
- 2 あえて詩的な表現にグリーンがこだわる理由に関して、グリーンはデューイに加えて、「科学的方法や協同的知性では本質的な緊張関係は解決しえない」としたデューイの同時代人を取り上げているという指摘が参考になる。その同時代人の一人にはエリオットがあげられている（Giarelli 2016: 8）。デューイが説く科学的方法や協同的知性にグリーンは飽き足らず、その埋め合わせとしてエリオットのような文学者を取り入れたと推察される。
- 3 この「(再) 覚醒」の先にあるのが「十分な覚醒 (wide-awakeness)」であり、それが「存在する別のあり方」という「可能性」の教育の基礎にあることについては、稿を改めて考察する。
- 4 グッドマンとティールは、この引用文の後半にある「われわれはそれらの苦しみが耐えがたいものであることを決定するのである」は引用していない。

参考文献

- Ayers, William 1998 “Doing Philosophy: Maxine Greene and the Pedagogy of Possibility,” in William Ayers, Janet L. Miller, eds. 1997 *A Light in Dark Times: Maxine Greene and the Unfinished Conversation*, New York: Teachers College Press, pp. 3-10.
- Dewey, John 1916 *Democracy and Education*, J. A. Boydston, ed., *The Middle Works of John Dewey, 1899-1924*, Carbondale: Southern Illinois University Press, 1985. (松野安男訳 1975『民主主義と教育 (上)』岩波文庫。)
- Eliot, T. S. 1958. *The Complete Poems and Plays, 1909-1950*, New York: Harcourt, Brace & Co. (福田恆存 1950「寺院の殺人」『エリオット全集 第二巻』中央公論, 3-73 頁。)
- Frank, Laurie S. 2011 “Maxine Greene: The Power of the Possible,” in Thomas E. Smith, Clifford E. Knapp, eds., *Sourcebook of Experiential Education: Key Thinkers and Their Contributions*, New York: Routledge, pp. 64-72.
- Giarelli, James M. 2016 “Maxine Greene on Progressive Education: Toward a Public Philosophy of Education,” *Education and Culture*, Vol. 32, No. 1, pp. 5-14.
- Goodman Jesse, Julie Teel 1998 “The Passion of the Possible: Maxine Greene, Democratic Community, and Education,” in William F. Pinar, ed., *The Passionate Mind of Maxine Greene: 'I am ... not yet'*, New York: Routledge, pp. 60-75.
- Greene, Maxine 1988 *The Dialectic of Freedom*, New York: Teachers College Press.
- Greene, Maxine 1995 *Releasing the Imagination: Essays on Education, the Arts and Social Change*, San Francisco: Jossey-Bass.
- Greene, Maxine 1997 “Teaching as Possibility: A Light in Dark Times,” *Journal of Pedagogy, Pluralism, and Practice*, Vol. 1, Issue 1, pp. 14-24.
- Johnson, Tony W., Reed, Ronald F. 2012 *Philosophical Documents in Education*, 4th edition, Boston: Parson.
- 桂直美 2008 「M. グリーンの美的教育哲学—リンカーンセンターインスティテュート「美的教育」プログラムへの反映」『三重大学教育学部研究紀要 自然・人文・社会・教育科学』第 59 巻, 207-215 頁。
- 木村浩則 2009 「M. グリーンの教育思想における「自由」の概念」『文京学院大学人間学部研究紀要』第 11 巻 1 号, 77-91 頁。

- 木村浩則 2014 「『可能性としての教育』とは何か：マキシ・グリーンの教育哲学との対話（1）」『文京学院大学人間学部研究紀要』第15巻，1-17頁。
- Kuklick, Bruce 2001 *A History of Philosophy in America, 1720-2000*, Oxford: Oxford University Press.（大厩諒・入江哲朗・岩下弘史・岸本智典訳 2020『アメリカ哲学史——一七二〇年から二〇〇〇年まで』勁草書房。）
- Noddings, Nel 1984 *Caring: A Feminine Approach to Ethics and Moral Education*, Berkeley: University of California Press.
- Pinar, William F., ed., 1998 *The Passionate Mind of Maxine Greene: 'I am...not yet'*, New York: Routledge.
- Salvio, Paula M. 1998 “Maxine Greene and the Project of ‘Making the Strange Liberty of Creation Possible’,” in William F. Pinar, ed., *The Passionate Mind of Maxine Greene: 'I am ... not yet'*, New York: Routledge, pp. 99-121.
- Sartre, Jean-Paul, 1966 (1943) *Being and Nothingness: A Phenomenological Essay on Ontology* (Hazel E. Barnes, Trans.), New York : Pocket Books.（ジャン＝ポール・サルトル，松浪信三郎訳 2008『存在と無——現象学的存在論の試みⅢ』ちくま学芸文庫。）
- 佐藤学 2003 「想像力と創造性の教育へ」『子どもたちの想像力を育む』東京大学出版会，2-26頁。
- 高屋景一 1999 「『想像力の教育』とデューイ教育学説」『日本デューイ学会紀要』第40号，83-88頁。
- 内田裕子 2016 「美術教育における『自由』の解釈についての考察」『美術教育学研究』第48号，81-88頁。
- Woolf, Virginia 1976 *Moments of Being: Unpublished Autobiographical Writings*, Jeanne Schalk ed., London: Sussex University.（ヴァージニア・ウルフ，J. シュルキン編，出淵敬子ほか共訳 1983『存在の瞬間——回想記』みすず書房。）
- 横山奈緒枝 2016 「社会福祉専門職養成における対話教育の可能性——省察とゆらぎに関する一考察——」『吉備国際大学研究紀要（人文・社会科学系）』第26号，109-120頁。